

平成 22 年 2 月 1 日  
学術情報課電子情報係  
石津 忠佳

## 海外研修報告

### 1 . 日程

平成 22 年 1 月 10 日 ( 日 ) ~ 1 月 15 日 ( 金 )

### 2 . 訪問先

University of Washington

### 3 . 目的

- ・米国の大学図書館における電子的資料の整備状況に関する調査
- ・米国の大学図書館における地域・学外との連携・協力に関する調査

### 4 . University of Washington について

University of Washington は、米国ワシントン州シアトル市に本拠を構える、州立の大規模総合大学である。アメリカ西海岸では最古の州立大学で、全米でも広く名前を知られる名門校の一つである。

公式の統計 ( <http://www.washington.edu/admin/factbook/> ) によると、大学の規模は、教員数約 6,000 人、学生数約 48,000 人 ( 学部・大学院合計 ) となっている。

### 5 . University of Washington Libraries

University of Washington の図書館は、総合図書館である Suzzallo & Allen Libraries や、学部学生用の学習施設である Odegaard Undergraduate Library など、役割の異なるいくつかの図書館や部局図書室によって構成されている。蔵書数や利用者数など、図書館の詳細なデータは、図書館統計の Web ページ ( <http://www.lib.washington.edu/assessment/> ) で確認できる。

### 6 . 調査項目についてのインタビュー

事前に作成した別紙 2 の質問事項について、担当の図書館員にそれぞれインタビュー調査を行い、次のような回答を得た。

## 6. 1. 電子ジャーナルの価格高騰への対処について

- ・大学の教育・研究にとって、電子ジャーナルやデータベースのような電子的資料は重要性を増している。当然、然るべき立場の人間が、これらの必要性を訴え、学内での予算確保に努めている。現在、図書館の資料費は1,200万ドルほどだが、そのうち約55%が電子的資料のための経費である。
- ・電子的資料の価格は高騰を続けているが、その一方で、大学が確保できる予算は限られており、問題が生じている。特に、昨今の不況による州財政の落ち込みから、大学に割り当てられる予算も削減傾向が続いており、状況は極めて厳しい。University of Washington でも、いくつかの電子ジャーナルの契約を打ち切らざるを得ない状況となっている。
- ・電子的資料の価格高騰への対策として、日本と同様、大学間で連合(コンソーシアム)を組んで価格や契約条件等の交渉を行っている。一定の成果は出ているが、電子的資料の継続的な価格上昇という問題を根本的に解決するには至っておらず、対症療法の域を出ない。
- ・図書館への寄付金はあるが、財源の恒常的な確保が必要となる電子ジャーナルやデータベースの契約には使用できない(寄付金の有無によって、サービスが提供できたりできなかったりすることは望ましくないため)。
- ・米国の大学図書館でも、電子的資料の価格高騰問題を根本的に解決する目処は立っていない、というのが実情である。

## 6. 2. 機関リポジトリについて

- ・機関リポジトリには、学術雑誌や電子的資料の価格高騰への対処、あるいは大学の研究成果を世に広く公開する、という役割がある。
- ・コンテンツの増加に関しては、順調であるとは言えない。機関リポジトリという試みに対する関心があまり高まらないことに加え、著作権による制限等もあり、コンテンツはなかなか増えないのが実情である。
- ・図書館のWebサイトや講演会、シンポジウム等で、折に触れ機関リポジトリの理念や意義を宣伝しているが、これらの理念が必ずしも浸透しているとは言えない。教員や研究スタッフの興味・関心を機関リポジトリに引きつけておくことは、特に難しい課題である。理想と現実との間に開きがあるかと問われれば、天と地ほどの開きがある、

と答えざるを得ない。

- ・機関リポジトリ関係の業務に従事している図書館員は、常勤職員換算で 1.5 人ほどである。

### 6.3. 大学と地域との連携について

University of Washington による地域・学外との連携・協力について、図書館関係では以下のようなことがあげられる、との回答を複数の図書館員から得た。

#### 6.3.1. 寄付金の呼びかけ

- ・大学の中で寄付金を管理する組織があり、目的別に様々な基金を設立して、外部からの寄付金を募っている。
- ・一例として、毎年、新入生とその保護者に大学の活動を紹介し、大学への寄付を募っている。これによって集められた寄付金は、学生用施設の整備や、資料購入等に当てられる。学内の学生用施設に投資される額は毎年相当な額に上る。
- ・図書館では、学部学生向けの学習センターである Odegaard Undergraduate Library をはじめ、各館の施設・設備（館内環境の改善や学生用パソコンの整備など）や、学生向けサービスの充実に、かなりの額が寄付金から支出されている。
- ・アメリカでは寄付に対して税制上の優遇措置が受けられることもあり、個人からの寄付金は多い。

#### 6.3.2. 小・中・高校生による大学図書館見学

- ・日本でいう「総合的な学習」が盛んな米国では、子供たちが資料を探しに大学図書館に来ることは珍しくなく、毎年、たくさんの学校から生徒が見学に来る。数が多いので、簡単な見学申込用 Web サイトを整備して、事前準備の合理化を図っている。
- ・将来の学生となるかもしれない彼らに、大学あるいは大学図書館に対する心理的障壁やマイナスイメージを抱かせないように、できるだけわかりやすく、親しみやすい説明・案内を心掛けている。

#### 6.3.3. 図書館資料の現物寄付受入

- ・寄付によって図書館に入ってくる図書や雑誌は、人文科学や社会科学の分野ではか

なり重要な位置を占めている。毎年数千冊の図書や雑誌が寄付によって図書館に入ってくる。

- ・ University of Washington が名望ある大学であるためか、資料を寄付したいという申込みは多い。
- ・ 寄付資料受入の基準は明文化されていない。受け入れる資料が多岐にわたるため、統一された詳細な基準を作るのが難しいからである。選書に係る意思決定は、専門家としての図書館員の責任と権限において行われている。
- ・ 選書作業の結果、学外の手機関が所蔵すべき資料であると判断したものは、学外の手然すべき機関に送っている。時には海外の手機関に送ることもある。

#### 6.3.4. 地域の団体が行う催し物への協力など

- ・ 地域の団体と共同で、資料の展示会やアジア映画の上映会などを行っている。
- ・ 大学が地域に根差し、地域に貢献していることを周知するために、地域の団体との連携は重要である。大学がどんな事を行っているかを市民に周知すること、および大学の研究成果を地域に還元することが必要である。これはまた、地域からの大学への協力を呼び込むための PR 活動でもある。

## 7. 図書館見学

滞在期間中に見学したのは、Suzzallo Library、Allen Library、East Asia Library、Odegaard Undergraduate Library の 4 館である。

### 7.1. Suzzallo & Allen Libraries

Suzzallo Library と Allen Library は隣接しており、実際には Suzzallo & Allen Libraries として、University of Washington における中央図書館としての役割を担っている。

ゴシック調の優美なデザインの建物で、いかにも歴史ある建築物という印象を受けるが、内部は機能的に整理・改装されており、全く古めかしさを感じさせない造りになっている。

施設的な面では特に変わったところはないものの、米国における大学教育のカリキュラムを反映してか、グループ学習や集団討論のための共同学習室や、プレゼンテーションが可能な視聴覚設備を備えた部屋が多数あるのが印象的であった。

## 7.2. East Asia Library

East Asia Library は、学内に多数存在する、主題分野別図書館の一つである。ここでは主に、中国、日本、韓国・朝鮮関係の資料を収蔵している。日本の文芸書も多数所蔵していた。

館長の話によると、昔は暇つぶしや単純な知的好奇心から East Asia Library を訪れる人が多かったが、近年の東アジアへの関心の高まりに伴い、学術的あるいは実用的な目的のための調査研究に訪れる人が多くなってきているそうである。

## 7.3. Odegaard Undergraduate Library

Odegaard Undergraduate Library は、学部学生のための図書館である。Library という名前はついていないが、実際には学部学生のための総合的学習スペースとしての性格が強い施設である。書架はさほど多くなく、代わりにフロア面に学生用パソコンが並んでいる。

学部学生にレポートや論文の書き方を指導する指導員や、パソコンや情報機器に関する疑問にこたえる技術サポート員が常駐しており、学生に対してきめ細かいサポートを提供しているのが印象的であった。

担当者によると、「学生の集まる場所」、「学生のための学習センター」というコンセプトで運営しているとのことであった。事実、多数の学生が頻繁に出入りしており、館内は常に活気に満ちていた。

## 8. 所感

### 8.1. 電子的資料をめぐる状況について

#### 8.1.1. 日米での状況比較

この点に関しては、日米共にさほど大きく変わることはないと感じた。資料の価格が高騰を続ける一方で、大学全体の予算が削減傾向にあることも、対症療法として大学同士がコンソーシアムを組んで共同で契約条件等の交渉を行っていることも同じである。

#### 8.1.2. 電子的資料の整備のあり方について

電子ジャーナルやデータベースなどの電子的資料は、現代の学術研究にとって必要不可欠なものである。よって、これに対する継続的な投資はどの学術機関でも続けざるを得ないだろう。一方で、資料価格の高騰が各機関の予算措置に困難（あるいは限界）を感じさせ始めているのもまた事実である。

この問題に関しては、今後しばらくは状況が劇的に変化することはないと考えられる。現行のビジネスモデルが、電子ジャーナルの出版者やデータベースの開発業者に

としては確立したものとなっているからである。現行のビジネスモデルが彼らにとって利潤をもたらし続ける限りは、電子的資料の価格高騰問題に関して、状況が劇的に変化・改善することはないだろう。

状況が変化するとしたら、それは現行のモデルに学術機関の予算措置が追いつかなくなり、業者にとっても利潤を生まなくなる時である。しかし、各国・各機関とも現在の状況に対応すべく予算確保につとめているから、まだ当面は在来のビジネスモデルが破綻するには至らないものと思われる。

よって、当面の間は、コンソーシアムによる価格交渉や各機関の努力による予算確保など、従来の対症療法的措置を地道に続けるしかないものと考えざるを得ない。

## 8.2. 地域・学外との連携・協力について

University of Washington は州立大学ということもあり、地域や学外との連携・協力を積極的に推進しており、この点は茨城大学と似ている。特徴的だと感じた点は以下の通りである。

### 8.2.1. 連携・協力の目的について

地域・学外からの協力と援助を呼び込むためには、大学の PR 活動をしなければならないが、地域・学外への協力はその一環でもあるのだということを、担当の図書館長が述べていた。この点に関しては、実利的な考え方で米国らしいと感じた。

### 8.2.2. 寄付金受入のための組織について

学外から資金的協力を取り付けることに対して、大学全体としてかなり組織的に、強力に取り組んでいるように感じた。寄付金を一元管理する組織の下に目的別の基金が多数設置されており、大学の運営全般にわたって寄付金が大きな役割を占めているように見えた。この点に関しては日本の国立大学よりも進んでいると考えられる。

また、米国人一般の考え方として、寄付は自分から獲得しにいくものであると考えている節が見受けられ、この辺りに日米の文化や考え方の違いを感じた。もっとも、日本の国立大学も外部からの資金協力取り付けが一層重要になってきているので、いずれ米国流の考え方が定着していくだろうと感じた。

### 8.2.3. 問題点

資金獲得のルートが多数存在するのは望ましいことだが、一方で、それは学外に多数の利害関係者を抱えることも意味する。この辺りの利害調整をうまくやってのける政治的手腕のある人材がアメリカの大学の運営にとっては欠かせないだろうと感じた。

大学運営の在り方が米国のそれに近くなりつつある日本の大学の執行部にとっても、そのような資質はますます重要になってくるのではないだろうか。

## 9 . 最後に

今回は私にとって初めての海外渡航であり、不安も感じたが、行ってよかったと思う。特に、外国語を使って外国の人間と円滑なコミュニケーションがとれたことは大いに自信となった。また、知識としてしか知っていなかった海外の図書館事情の一端を垣間見られたことも、私にとって良い勉強になった。

最後に、今回の研修に際してお世話になった、茨城大学および University of Washington の全ての関係者にお礼を申し上げて、この報告を終わりたい。

(次ページに、付録として図書館施設の紹介を記載する)



Suzzallo Library遠景。

Suzzallo Libraryは、University of Washingtonにおいて、中央図書館としての役割を担っている図書館である。

近くで見ると、彫刻などさまざまな意匠がほどこされており、建物それ自体が美術品であるかのような印象を受ける。

古めかしい外見とは裏腹に、建物内部は機能的に整理・改装されており、建物の古さを感じさせない造りになっている。

Odegaard Undergraduate Library (写真中央) 遠景。

内部は、図書館というよりは学習センターに近い造りになっている。書架の数は少なく、代わりに多数のパソコンと学習機が設置されている。



Odegaard Undergraduate Libraryの学生用パソコン。茨城大学図書館にもパソコンが数十台設置されているが、ここではフロア一面を丸ごと使って、数百台のパソコンを設置している。

下の写真は、パソコンの利用に関する疑問などを解決してくれる専任技術者のブース。



Odegaard Undergraduate Libraryには、学生にレポートや論文の書き方を指導する施設もある。入口には、「Writing Center」との掲示が出ている。



海外研修の日程および目的について

2009年10月28日  
学術情報課 電子情報係  
石津忠佳

訪問予定期間

2010年1月11日(月)～1月13日(水)

訪問目的

University of Washington への訪問では、以下の点について調査させていただきたい。

1. 電子ジャーナルの価格高騰への対処について
  - (1) 予算は毎年どのように確保しているか。
  - (2) 電子ジャーナルの価格は今後も上昇傾向が続くものと予想されるが、University of Washington としては、今後の電子的資料の収集について、どのような見通しを立てているか。
  - (3) 以下の点について、数値的なデータをいただければ有難い。
    - 電子ジャーナル契約に要した予算額の推移(過去4～5年程度)
    - 電子ジャーナル予算の毎年の支出内訳(どの業者に、どの程度の予算を割いているか)
    - 電子ジャーナル予算の確保における負担元の内訳(全額経費、学部経費、あるいは寄付金など)
  
2. 機関リポジトリについて
  - (1) University of Washington としては、機関リポジトリにどのような役割を期待しているか。
  - (2) 現状と理想の間には開きがあるか。あるとすれば、今後どのような点を改善すべきだと考えているか。
  - (3) 機関リポジトリの維持管理には、職員をどの程度配置しているか。
  - (4) コンテンツの拡充に当たって、学内への周知や教員との連携をどのように実現しているか。
  
3. 大学と地域との連携について
  - (1) University of Washington では、地域との連携に関してどのような方針を定めているか。
  - (2) 図書館として、具体的にはどのような活動をしているか。
  
4. その他
  - (1) 図書館の運営等に関して
    - ・ 予算、組織、構成員、意志決定等の会議や委員会
    - ・ 図書・雑誌の選定方法・手順、職員の研修 など
    - ・ 利用者数等の統計情報
  - (2) 図書館の見学